

名物裂の成立とその背景

——美的「さび」とのかゝわり——

蔵 重 和 子

一

名物裂に関する研究はこれまで幾多の人々によりなされてきたが、それらの多くは主として染織史的観点によるものであった。

そこで小論では、名物裂の発生が鎌倉時代の禅宗の伝来に遡ることに鑑み、茶礼に伴って発展した名物裂を中世から近世初期の茶湯文化の中に特に珠光以降の「わび茶」に視点を置き、茶会を構成する重要な要素である墨蹟・絵画などの表具類の表装裂や茶器・茶道具の仕覆・袋裂について、「わび茶」の茶会全体の中でどのように位置し調和してきたかそして如何なる役割を為したかをそれらの美的表現の中に考察するものである。

二

飛鳥・奈良時代を中心とした法隆寺裂や正倉院裂などの上代裂は当時の隋・唐からの将来品で第一次外来品と呼ばれるのに対し、名物裂

は中世以降の交易によりもたらされたものとして第二次外来品として扱われている。その渡来時期は次のように区分される。

それによると、

- 一、極古渡り（一四〇四）勘合貿易の始め、この頃のものが多い（これより以前のものと及び一四一一頃迄のもの）
- 二、古渡り（一四三三）勘合貿易再開（この頃のものとより一四九三頃迄のもの）
- 三、中渡り（一五〇四）（この頃のものとより一五四七頃迄のもの）
- 四、後渡り（一五五八）（この頃より一五九二頃迄のもの）
- 五、近渡り（一六〇三）江戸幕府を開く（この頃より一六五二頃迄のもの）
- 六、新渡り（一六五二）（この頃より一七二一頃迄のもの）

（神谷榮子編「日本染織年表」）

「極古渡り」は藤原期から鎌倉に亘るものが多く栄西など禅僧により宋から将来されたもの。「古渡り」は足利三代將軍義満時代に明との貿易による品が主たるもの。「中渡り」はその第二期の交易品で八代將軍義政の東山文化の時期と一致する。「後渡り」はそれまでの中

国のみならず中央、南アジア西欧などの南蛮貿易によるものであり、名物裂としてはこの「後渡り」までのものがほとんどである。何故ならば「近渡り」は朱印貿易によるもので「後渡り」の時期のものとはほとんど変わらないからである。「新渡り」は家光の鎖国時代のもので清やオランダのみからのものである。

次に、名物裂に附された名称の由来についてみると、

①所持者の名前を冠したもの

(例) 利休間道、珠光緞子など

②文様を冠したもの

(例) 二重蔓金欄、宝尽し金欄など

③寺社・所在地に拠るもの

(例) (興福寺金欄、鎌倉間道など

主として所持者によるものが多く、これはすでに茶人として大成した者が主なもので、村田珠光や宗珠、武野紹鷗、千利休、古田織部、小堀遠州など中世から近世初期にかけて茶湯文化を築いた茶人たちで、その卓越した鑑識眼や美的感覚、好尚を反映してその美的価値をたかめるとともに彼らの持つ茶器・茶道具・幅物をも権威づけ、自身の茶湯観を確立していった。著名ゆえにその所持する茶器・茶道具・幅物等がすぐれた美意識と選択によって名物としての価値を生じたのである。

三

ところで、名物裂の名称及びその選定はいつ頃成立したかはまだ明

確には解明されていない。しかし茶湯が普及した近世初期半ばに小堀遠州によって表装裂・袋裂など名物裂命名のための整理がなされたことをまず第一に上げなければならない。彼は利休の高弟古田織部を師とし、茶人としてのみならず茶室設計や造園家としても知られ、徳川三代將軍家光の茶湯指南をつとめ、その優れた芸術的才能を生かして茶器・茶道具・書画などの鑑識及び選定につとめ、それまでの名物の上に新たに中興名物を制定した。そしてそれまでの茶人たち所有の茶器・茶道具の仕覆裂・幅物の表装裂などの染織品を整理して名物裂成立の基礎を築いた人物である。それから一世紀余を経た元禄初期、出雲松江藩第七代藩主松平不昧(治郷)により『古今名物類聚』が編纂され、「名物裂」の名称が成立したのである。遠州の功績に拠る所大である。

そこで、ここに至るまでの名物裂成立に関する紆余曲折について、明石染人『名物錦繡類纂』を手懸りとして述べてみたい。

明石氏はその中で、

『古今名物類聚』上梓の寛政三年に先立つこと百九十五年前の文禄四年(一五九五)七月十五日の奥書のある別所吉兵衛の署名にかゝる『名器録』と称する稿本の中に「銘物地氈」の条目あることを見出したので、銘物裂の名称はすでに桃山時代に可なり有名となり茶人間に珍重されていたことを知ることができて、それをここに明らかにしておきたいのである。

この『名器録』は大部分藤四郎以下の名物茶入の記事を載せているが、その巻末に「小壺の由来」と題して藤四郎の略伝、その家系列伝作品、茶入流、当時の作者を挙げ、末尾に文禄四歳乙未

七月十五日、別所吉兵衛と署名してあり、更にその次に「銘物地
地」と題して

漢東切と云名は古き見事漢渡一反買取夫を袋切に裁銘々に分け
て遣しける其世活を致たる人の名さして何漢東と申ける又其品い
ろ／＼名物と名付けるも有一反と云は巾四尺位に一丈余りのもの
也

と冒頭して、漢東十九種、古金欄三十二種、緞子十一種の名称
と略説並に時代を書いてゐるのである。これを見ると『古今名物
類聚』や『和漢錦繡一覽』⁽¹⁾の底本である様な気がするのである。
とにかく『名器録』の出現とこの存在の意義は可なり吾々にとつ
ては深いものであると欣んでゐる。

と述べておられる。しかし、桃山時代のこの他の「茶器名物集」⁽²⁾や
「神谷宗湛筆記」⁽³⁾にも名物裂の名称は見受けられないばかりか、当時
の茶人たちによつて選ばれた裂類にもその名称は記録されていないの
である。また『天王寺屋会記』や『松屋会記』にも幅物の表装や茶器
の仕覆に使われた裂類の色彩や織物についての詳細な記録は見られる
が、その名称はない。したがつて桃山時代には既に名物裂の名称が発
生していたという確証はまだないのである。

時代はくだつて、元禄四年の『鴻池道具帳』には次のような裂類の
名称の記載が見られる。

一唐物八雲肩衝 白極緞子袋 壺ッ

宝珠切袋 壺ッ

並若狭四角盆有茶入

申緒書巻物有

(代金他省略)

右者片桐出雲守様所持其後小堀遠江守様二有

一唐物塩瀬戸衝 白地丸竜緞子袋 壺ッ

塩世漢東袋 壺ッ

珠光緞子袋 壺ッ

(代金他省略)

一唐物高根文茄 時代綾杉切袋 壺ッ

今春緞子袋 壺ッ

(代金他省略)

右者古田織部殿所持

一唐物 塞 大燈袈裟切袋 壺ッ

さ、つる緞子袋 壺ッ

(代金他省略)

右者小堀遠江守様御所持

一夏山春慶鸞首 金地二重絃大牡丹袋 壺ッ

綸子漢嶋袋 壺ッ

(代金他省略)

一角倉飛鳥川 花色花うさぎ袋 壺ッ

漢嶋袋 壺ッ

(代金他省略)

一玉の井根貫肩衝 萌黄角竜切の袋

大内花菱切の袋

吉野漢嶋切の袋

右者從權現様松平越後守様へ被為進其時おそ桜と名御付其後

小堀遠江守様玉の井と御付越後守様と堀田筑前守様へ被為進候
由

(茶道全集 巻の十五 創元社)

以上をみても各々の裂地に名称が附されており、中でも「白極緞子」「珠光緞子」「今春緞子」「宝珠切」「さ、つる緞子」「大内花菱切」「吉野漢鳴切」「花うさぎ」「金地二重絃大牡丹」などはのちの名物裂に選定されているものである。

次に、元禄七年菊本嘉保編纂の『万宝全書』の巻八『古今和漢諸道具見知鈔』の中に載る「古今織物時代端之色々」には、次のような裂類の名称がみられる。

大内菱 袋端 名物金欄菱之紋有

金剛切 袋端 名物の段子也

白極切 袋端 名物の唐段子

珠光切 袋端 名物の段子

紹鷗切 袋端 名物の段子

これらは先に記した裂類と一致し、それぞれ名物の金欄または段子(緞子)と記されており、名物裂を示している。

このことより、元禄七年頃には少なくとも名物裂の名称が附されていたことは確かである。そしてこれらを整理し、はじめに述べた小堀遠州の業績をもとに、以上のような書物を底本とし、さらに新たな裂類を加え名物裂は松平不昧によって『古今名物類聚』に整理され、公にされたのであろう。

四

名物裂の発生は、禅宗とともに伝来した茶や墨蹟・絵画・茶器・茶道具そして禅僧の袈裟・染織品などの将来品にその源があり、禅宗の発展に伴って茶も普及しいわゆる茶禅一味の文化が禅宗の間に生じた。ここではまず名物裂が禅宗文化の中でどのような役割を果たし且つ発展してきたか、そして人々の間でどのように受けとめられてきたかを、当時の茶人たちの茶会記などを通して辿ってみたい。

鎌倉時代に中国・宋よりわが国に最初に禅宗を伝えたのは栄西(臨済宗)であると云われる。彼はわが国における禅門の始祖として中世の禅宗史に大きな足跡を残した。

栄西が伝えた禅宗では茶は香を焚くのと同様に宗教的・儀式的なものを母胎としており、彼はその著『喫茶養生記』の中で「茶は人間の身体で最も大切な心臓を健全に保つための薬である、と同時に眠りを少なくして心眼を開く精神の啓発を促す、すなわち喫茶は己の悟りを極める仏道成就への道である」と説いている。

このように禅宗の宗教的儀式的立場を母胎とした茶も鎌倉末期から南北朝にかけ二つの方向に分かれるようになる。一つはそれまでの禅札としての要素を離れ、広く大衆的・娯楽的意味あいものに傾斜していった、「闘茶」であり「茶寄合」である。これらは玄恵の『喫茶往来』や『太平記』の記述に数多く見られるように、諸国の茶を喫み品種をあてる遊戯で豪華な賞品を賭してなお酒をふるまい、また「茶寄合」「連歌会」の名目で大衆化していった茶会のこと、本来の禅

札からすると「けしからずもてなさる茶」という所である。

いま一つは、次第に禅僧の間で五山文学を学ぶことによりその文学的素養から美にめざめ、美的表現、美的なるものの発見へと趣味的な様相を帯びるようになり、本来の宗教的・儀礼的意味あいを残しながら次の東山文化へと受け継がれ、その中で將軍家の殿中茶湯いわゆる「書院の茶」として、自然美や唐物名物の莊嚴美が加味され発展していくのである。この後者の発展の中に、本旨、名物製の「美的なるもの」がうかがえるのである。

禅宗の伝来以来、特に臨済宗の禅僧の袈裟には金襴が多く用いられた。それは禅宗とともに宋から明にかけて交易が盛んに行われ数多くの唐物が将来されたことによる。宋代仏教の影響を受けた袈裟は、九条以上二十五条までの大衣（大袈裟）が中心で、現存する物では京都大徳寺塔頭龍光院蔵（明代製作）無縫の二十五条袈裟赤地縁唐草文様金襴があり、また天龍寺開山・夢窓国師像の九条金襴着衣、さらに鎌倉・寿福寺明庵柴西木像の九条袈裟がある。

このように金襴の袈裟は禅僧衣としてのみでなく、禅僧祖師着用の袈裟を用いて墨蹟・絵画などの表装をおこなうことは、その墨蹟や絵画そのものを祖師自身として尊崇するための莊嚴の意味を持ったのである。その金襴裂がどの墨蹟・絵画に調和するかそしてそれが掛けられる場所とその取り合わせの見立てにも大いに美的感覚を要したのである。

足利六代將軍義教の同朋をつとめ後に八代將軍義政にも仕えた能阿弥は、それまでの唐様の鬨茶から脱して茶の札法を確立、さらに唐物の墨蹟・絵画等の表具を書院の和風用に改裝した。彼は和漢の書画の

鑑識にすぐれ、唐物表具類の改裝は彼によつてははじめられたと云われる。彼はまた書院飾りや台子飾りを考案して貴族趣味の殿中書院の茶の和様化を進めた人物でもある。

のちに彼の引き合せて義政に仕えた村田珠光も茶の和様化につとめた人物で、彼は唐物の表具・茶道具等の目利きや改裝は能阿弥に学んだのに対し、能阿弥も茶湯札法は珠光を範としたらしい。「珠光一紙目録」に「此一巻ハ珠光目利稽古ノ道ヲ能阿弥ニ問窮タル処ノ日記也蹟目宗珠ヘ相伝ス」（『山上宗二記』）と能阿弥に教わった目利きのしかたを嗣子宗珠に伝えている。珠光もまた和漢表具や茶器・茶道具の鑑識にすぐれ、数多くの表具の改裝を手懸けたのみでなく、備前や信楽などの素朴な民間の雑器も「冷え枯るる」と称し高く評価して彼の和風の茶湯に取り入れた。珠光は義政に仕えて還俗し、儒教思想を根底に庶民の茶を標榜して京都六条に草庵を構え、四畳半茶室を造り「わび茶」の点茶法を考案した。和様茶湯の開山・始祖と云われる所以である。

義政の東山時代は能阿弥・珠光という二人の優れた茶人によつてはじめて和様の茶湯が成立した時代とされる。

五

珠光の「わび茶」は、嗣子宗珠や武野紹鷗（珠光の門人宗陳・宗悟の弟子）によつて受け継がれ、さらにそれを推進して紹鷗の高弟利休によつて大成された。以下、若干それについて述べておきたい。

珠光の四畳半の「わび茶」は將軍家の「書院の茶」と庶民の茶「下

「京茶湯」を融合したものととして宗珠に継承された。彼はそこからさらに当時交流のあった文人公卿・三条西実隆の影響を受け、彼の茶趣は、意識的にまた無意識的にも公家好みの伝統的な古典趣味が加わり、風流を「わび茶」に取り入れることにより公家社会にも広まっていたのである。彼は「わび茶」に積極的に和物を取り入れ、墨蹟・絵画の表具寸法を四畳半小間に合わせて改装した。宗珠のもとを訪れた連歌師・宗長は一五二六年に、

下京茶湯ト此ゴロ数奇ナドトイヒテ、四畳半敷、六畳舗、ヲノ
ヲノ興行（傍点 筆者）

と記しており、ここでは「数奇」＝「わび茶」と解釈しているようである。「数奇」が茶湯を指す例には、歌論集『正徹物語』（一四四—五二頃成立）があり、ここでは「歌数奇」に対して「茶数奇」の語を用いている。「数奇」に関して『日本教会史』には「数奇という言葉は、動詞の *suku* から出たもので、欲しがる、愛着を持つ、また気に入ったものに心を寄せるという意味である」と解釈されている。

『紹鷗門弟ヘノ法度』には

数奇者ハ捨レタル道具ヲ見立テ茶器ニ用候事、況ンヤ家人ヲヤ（第
八条）（傍点 筆者）

数奇者トイフハ隠遁ノ心第一ニ侘テ、仏法ノ意味ヲモ得知り、和
歌ノ情ヲ感じ候ヘカシ（第十条）（傍点 筆者）

「数奇者」とは鑑識眼があり、見立ての出来る人で、且つ文学的教養があり精神修養の深いことを条件に挙げている。

さらに、宗珠の「数奇」に関する一文として、「鷲尾隆康日記」（『二水記』）に、

大永六年八月二十三日の条に、

午時、青蓮院ニ参ズ、万里小路・阿野少将・高倉少納言同道ス、
池ノ中島ニ於テ御茶有り、種々ノ儀モットモ興有り、当時ノ数奇、
宗珠祇候ス、下京ノ地下ノ入道也、数奇ノ上手也（傍点 筆者）

宗珠は、珠光の「わび茶」をさらに推し進め「わび茶」＝「数奇」の域に到達させた人物であるが、それは同時に紹鷗の業績でもある。紹鷗もやはり茶湯の様化つまり、唐様趣味に伝統的な古典趣味を融合させ、富貴・豪奢という貴族的で典雅な美を退け、庶民的で簡素な美を志向した。そして、珠光の四畳半茶室に残存していた「書院の茶」の要素を排除して一層「わび茶」を極めていった。民間の日常生活で使われている雑器に素朴な美を発見して茶器に登用させ、茶室に自在鉤を吊るし、水指に釣瓶を、建水には曲物の面桶を、さらに竹の蓋置を使い始めたのも、他ならぬ彼、紹鷗であった。さらに彼は表具の類や茶器のみでなく、和歌にも造詣が深く定家の色紙を表装して床に掛け、和歌の優雅な情趣の古典趣味を基調とした茶会を成立させた。そしてこの後桃山時代に入って、これが彼の弟子利休によって大成されることになる。

六

茶湯は茶会における設いの全体的な調和を生命とする芸術である。茶会での幅物・花入と花・茶入・水指・茶碗などの中でも、「掛物ホド第一ノ道具ハナシ、客・亭主トモニ茶ノ湯三昧ノ一心得道ノ物也。墨蹟ヲ第一トス。」（『南坊録』）と記されているように、特に床の間の

掛物は茶会の主題を提示し、主催者の趣向を示す点で重要な役割を担い、その茶会構成の中核をなすものである。

したがって名物裂の中でも、茶器・茶道具の仕覆・袋物は勿論であるが表装裂の方が重要な役割を担うことになる。

以下、いくつかの「茶会記」によって辿ってみたい。

「松屋会記」の「久政茶会記」に

天文十一年卯月四日

一堺天王寺屋宗達へ久政 少清 又五郎（前略）手水ノ間ニ盆ヲロシテ、船子ノ画カカル、牧溪筆 賛虚堂 上下金地 中萌黄

一文字風帯紅（後略）

南宋の高名な画僧・牧溪の作品は東山御物にも所収され、しかも虚堂の賛が附されていれば最高級の名品である。「茶器名物集」にも、

一虚堂之墨蹟 関白様ニ有

此一軸天下一ノ名物也。昔幾島所持也

とあり、この虚堂賛の附された牧溪の軸は秀吉も所持したことのある天下一の名物とある。そのような掛物の表装裂には、上下に金地金欄、中廻には萌黄金地金欄、一文字と風帯は紅地金欄が使われた、その豪華・華麗なさまがうかがわれる。

同「松屋会記」

永禄十三庚午年松屋源三郎会 宗久宗叱二月廿八日晝

一巾口リ 九リン釜ツリテ

一床鷺ノ絵 終マテカケテ 肩ツキ四方盆ニスヘテ、

一水指 シカラキ 黒茶ワン メンツ引切

一鷺ノ晝 徐瀨ノ筆、珠光ヨリ伝来ノ由、絹ノ内長サ三尺三寸二

分 ヨコ一尺七寸表具上下茶ホケン、中ムクノミ色トンス、風

帯中ト同シトンス一文字ナシ 露紫

一肩ツキハ 高サ二寸五分半 胴二寸八分、ロサシ渡一寸五分

余、底一寸六分 袋トンスムクノミ色 緒紫

この徐瀨の白鷺の絵について「茶器名物集」に、

一徐瀨鷺之絵 奈良漆師屋

右一軸ハ珠光之昔所持也。数寄道具也。赤色絹ニ書候。紹鷗道陳ヲ始メ古人褒美ヲ仕給也。但代八百貫計ト紹鷗申候

と記されており、この松屋が所有している鷺の絵は東山御物に属していた時分には表装は豪華な金欄裂であったが、義政から珠光が拝領してのち上下を茶地の北絹、中廻と風帯は同じ棕の実色の純子に、一文字は省略、と「わび茶」用に改装された。純子（綴子）は豪華華麗な金欄とは対照的に、唐草の小文様などのしっとりとした渋味と控えめ沈静さが特味の柔らかな風合いをもつ織物である。この改装に示された珠光の好尚とすぐれた美的感覚には、彼を範とする紹鷗やその弟子利休、そしてその後織部や遠州に至るまで絶賛したのであろう。

珠光の「わび茶」の心が、宗久を招じたこの茶会での茶室の設けに生かされている。それは鷺の絵の表装裂と名物とされる肩衝の袋には同じ棕の実色の純子を用い、表具の露と肩衝の袋の緒は紫で統一され、また「わび茶」にふさわしく素朴な信楽の水指、炉に吊した釜……という設けには珠光の創始による「わび茶」の心が受け継がれている。

今少し「松屋茶会記」の「茶湯他会記」に「わび茶」の設けをみることにする。

永禄十一年

正月五日朝

一堺博多ヤ宗シユヘ 久政彦人

北向四疊半 小イロリ シヤウハリ 上鑲之後 虚堂墨跡カ、

ル タテ一尺横二尺ホト 文字四十三ヶ印

一寸二分四方也 上下カラ茶ホケン中白金砂唐花コヘリ 風帯

紺ノ金砂

手桶下台天目、ヤラウ亀ノフタコトク ウス茶 高ライ茶ワン

虚堂墨蹟の表装裂には、上下唐草北絹、中廻に白地金紗、風帯は紺地金紗、一文字のない掛物は簡素ですつきりしており、「わび茶」によく用いられる。金紗は薄地の瀟洒な織物で沈静な情趣の枯淡な味わいがある。

天正十一年

十二月十三日朝

一高畠五郎左衛門ヘ 宗治 久政二人

枇杷絵 舜拳筆 ヒワ数十八カ 葉亦八ツ

上下香ノインキン 中ムラサキインキン

ハヲチノツリ物 自在 アカフ天目

日本台 手桶ヒセン水下 コトク

高ライ茶ワン ヤラウ

舜拳筆枇杷絵の表装裂には、上下に香色の印金、中廻は紫色の印金が使われている。

印金裂は箔置きで、紗に金箔を施すことが多い。それゆえ、仕覆・袋物には不向きのためもっぱら表装裂に使われ茶人たちに好まれた。

中でも紫地印金は、深く沈静さを湛えた上に箔置きしたもので、瀟洒な清涼感が漂う織物である。

慶長十二年

丁未十一月廿四日晝

一四聖坊ヘ 上生仁 二徳 久怡 久重四人

キソウ筆 マメホウ、鳥一、大キナル印一アリ

上下コンノ金砂 中白地小文金欄 一文字タン色キンラン

後二信楽筒ニウメ・水仙入、真釜信楽水指ツルクヒ茶入

タウ茶碗 ホヤ香呂 メンツ

徽宗皇帝筆のマメホウの表装裂には上下に紺地金紗、中廻は白地に小文の金欄、一文字にあか^(母)色の金欄が使われ、薄地の紗との対照に興趣がある。

七

「わび」「さび」に関して究明する時、まずこれらを一般的意味と美的意味について述べなければならぬ。

「わび」も「さび」も単に感覚的なものとしての象徴化をいうだけでは「美的なるもの」になるとは限らないのである。何故ならばこれらの象徴化そのものにも、美的と非美的の区別があり得るからである。「わび」「さび」の意味内容の象徴がそれだけで単独に抽象的に取り出して考えるならば、それは単なる感覚的・心理的現象としての象徴に止まり、内容的意味の一面性から云つてもその象徴化形式の単純性からも美的本質としての「わび」「さび」を表現するものではなく、

単に素材的・要素的分子を意味するに過ぎないのである。

したがって「わび」「さび」を美的範疇として究明していくためには、これらは、その歴史的に明確な芸術の世界という背景のもとに狭義の、客観的・分析的に対象の美的性格を規定する概念としてではなく、その芸術の世界の中に自然発生したものであると同時に広義の「美的なるもの」としてその芸術分野の中心概念・理想概念となり総合的意味あいをもつ時、我々はここにはじめて美的価値を認め美的範疇としてみることができよう。

茶湯芸術の場合美的意味としては正しく広義に用いられ、主観的・精神的観点に重きを置き茶湯のもつ趣味性をも包含した理想概念として解されねばならない。その概念の意味は、深さ・広さにおいて自ずから発展することにより多様で複雑な諸契機を統一した、もはや理論的分析の不可能な極めて微妙な内容をもつものとして総合的に把握されねばならないであろう。

「わび」「さび」のような極めて日本的な問題は、個々に究明するよりも総合的に一つの美的範疇として取り上げ、日本の精神的なものとしての究明が望ましい。それは単に芸術的領域にのみ限られたものではなく、広く宗教・歴史・道徳と深くかゝわり、その源は超芸術的境地から出たものと考えるところからはじめなければならない。

茶湯における「わび」「さび」も、究極⁵⁾の理念的意味にまで発展すれば両者とも略同一境地を目指すものであると言って差支えないであろう。

千利休も、その逸話⁶⁾の中で、「わび」「さび」を全く同義として解していたようである（「茶話指用集」）。

松平不昧伝「茶の湯心得五ヶ条」の第一条に、「茶の湯はいかにも奇麗にいさぎよく、さび⁷⁾たる中にも見所あるを本とす」（傍点筆者）（茶道全集一「古今茶説集」）と「さび」の美的積極的意味を認めている。

以上のように「わび」「さび」は美的概念または美的範疇としては帰一すべきものであることから、両者を略同義の概念として見てよいであろう。

茶室の設いの構成は、茶会を主催する茶人の茶心を表出して各分子間で互いの美的調和を保ちつつ総合的に茶趣・茶会の傾向を演出する。茶室の設いや壁や床の間の色・茶器の釉の色や表具と表装裂の配色・茶道具の選択を配置にとって、感覚的・視覚的はもちろん感性的な美的表現が、茶室の設いと茶趣を決定する重要な要素である。

茶室のもつ閑寂性・遊戯性・自由性という特性もまた茶湯の「わび」「さび」の演出にとって重要な事柄である。外部から隔離された静寂な小空間、あかりとり的小窓、穴居への出入口のような躍口、四畳半や二畳半などという制約された空間で、自然を遮断して自由自在に視覚的・精神的に創意を凝らし心の沈静化をはかる。そこでは、色相の複雑な陰翳の、暗褐色や錆色、また熟した渋柿の色・棕の実色・鈍色・丹色^{あか}・香色・紺色・萌黄など反多彩主義ではあるが単彩でもない。そして寒色系で統一した色調、そこに「わび」「さび」の感覚的・視覚的な美のみでない茶湯全体の醸し出される美的雰囲気^{あまぎ}が人々の心に訴えるのである。この色彩における美的「さび」は、この頃出現した辻ヶ花染の色調にも相通じるものがある。

八

美的「さび」に表現された色彩の象徴効果は大きく、茶室や茶道具等において名物裂の果たした役割は大きい。

茶人それぞれの好みの表具の表装裂や茶器・茶道具の仕覆・袋裂に使用された名物裂には、それらの道具同様茶人の心が込められ、その美的価値は時代を越えて受け継がれ、文化の伝統の中に一つの美的概念・美的範疇として生きているのである。（完）

註及び参考文献

- (1) 江世泰翁編輯 文化元年九月
 - (2) 山上宗二（統群書類従十九輯）
 - (3) 神谷宗湛（全右）
 - (4) 『山上宗二記』（堺市史四卷 南本）
 - (5) 大西克禮『風雅論』岩波書店
 - (6) 嬉遊笑覧 卷一（「狐格子」）
 - (7) 前出『風雅論』
- 荻須純道『日本中世禅宗史』木耳社
- 桜井景雄『禅宗文化史の研究』思文閣出版
- 守田公夫『名物裂の成立』奈良国立文化財研究所
- 小堀宗慶『名物裂鑑金銀欄』
- 『茶道全集九卷』（「松屋会記」）淡交社
- 『全右 二卷』（「喫茶往来」）
- 『全 四卷』（「南坊録 卷五、六」）
- 『全 七、八卷』（「宗達茶湯日記 他会記」）
- 『全 十卷』（「今井宗久茶湯日記 抜書」）

- 永島福太郎『利休の茶道大成』（続茶道文化論集）淡交社
- 『類聚三代格 卷十九 禁制事』（国史大系二十五卷）
- 『茶道全集 卷ノ一』（「茶道史講話」）創元社
- 『全右 卷ノ三』（「茶室の思想的背景とその構成」）
- 『全 卷ノ十五』（「鴻池道具帳」）
- 井筒雅風『袈裟史』雄山閣出版
- 芳賀幸四郎『東山文化の研究（上）』思文閣出版
- 全右 『近世文化の形成と伝統』思文閣出版
- 鈴木敬他『東洋美術史要説』吉川弘文館